

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

研究例会報告(1971)

雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	1971
ページ	121-124
発行年	1971
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010925/

研究例会報告——一九七二年度

座談会 「文化接触とライフヒストリー」(十月十八日)

——アーメッド・アッパナイ氏を囲んで——

アーメッド・アッパナイ氏はカザン・タタールの出身であるが、一九一七年のロシア革命にともなうて、シベリア經由日本に亡命した。一九二二年二月のことである。以後日本に住んで約半世紀。その貴重な体験を何らかの形で記録しておきたいとの声が以前から研究員の間にあった。たまに内藤智秀研究員がアッパナイ氏と親交のあるところから紹介の労をとられ、座談会の形式の例会を開いた。紙数の都合により、多くを割愛せざるを得ないが、以下掲載する部分は、録音をできるだけ忠実に記録したも

のである。この座談会を終って一週間余、アッパナイ氏は突然不帰の客と
なられた。数奇の運命の中で一生を終られた同氏の冥福をお祈りする次第
である。(文中Aはアッパナイ氏)

——何年前に日本に來られたか

A 一九二二年二月一七日、政治的理由でカザンにいらなくなり、日
本に亡命した。一九一六年ロシアが負けてから革命が起きた。ロシアに
住んでいるいろいろなトルコ人はカザン・トルコ・タタール(カザン
に住んでいるトルコ・タタール)といわれた。

カザンの地においてタタール族とロシアとは長い間対立していたが、
最後にイワン帝(トルコ人は彼を人殺しという)と戦って敗れ、カザ
ンはロシアにとられ、のちタタール人は殺害されたり、改宗を強制され
たりして圧迫を受けた。このロシア人による圧迫をいつまでも忘れず
に、革命を好機としてタタール人は団結し、一九一七年、各町よりタ
タール人の代表が集まり、コロブ大会を結成し、建国運動を開始した。

大会の準備であった。大会はモスクワで開かれた。その時代はまだ
ケレンスキーだった。彼はこの運動を許していたが、長くは続かなか
った。ケレンスキーが倒れ、やがてタタール人への圧迫が始まり、ソ連と
戦いながらバイカル湖を渡り、シベリアまで来て日本軍に助けられ、日
本に渡った。シベリアでは二年ほど戦っていた。オウムスク(町の名)
の時トルコタタール軍は三つであったが、ウパでまとめられた。コルチ
ヤックはロマノフ朝の昔に返すといったが、拒否してタタール人は独立
し、三つになったのである。チタでセミョーノフ(コザック)は三つの
政府をつくろうとバラバラにしたが、失敗してセミョーノフはシベリア

に逃れ、再び軍を編成したが、ソ連に敗れた。われわれはシベリアで負
けてバイカル湖を徒歩(冬のため結氷)で渡り、イステニシュで日本軍
に助けられた。

——日本に來たのは全体で何人位か

A 普通の人は兵隊に混って逃げた。およそ一〇〇家族四〇五〇〇人位が
日本に渡って來た。一九二〇年頃から住むようになった。コロバンガ
リ(セミョーノフと関係があったらしい)は日本に礼拝所および学校等
をつくった。渡日したトルコ・タタール人は東京で民族上の立場の人々
と宗教上の立場の人々と意見の相違によって二つに分裂した。われわれ
の中にイスハキイといわれる人がいて民族運動を起したが、コロバンガ
リーと意見が合わず対立し、二人はともに日本から追放された。(日本
からはスパイ活動をしたといわれたが、結局は政治に関与したために日
本から出された)のちコロバンガリーは第二次大戦中、ハルピンからモ
スクワあたりにつれて行かれた。イスハキイはトルコで亡くなった。

——渡日経路は

A シベリア→ハルビン→朝鮮→門司に至り、各々の仕事に応じて
諸地方に散った。日本政府の援助はなかったが、軍の援助があった。亡
命した時はみな無国籍であった。第一次大戦後、トルコ大使が日本に來
た時、トルコ国籍の受領請願を出した。トルコ側は喜んでトルコ国籍を
くれた。現在はみなトルコ国籍を持っている。ソ連からはソ連国籍をく
れるといわれたが、われわれはロシアが嫌いなのでもらわなかった。

——言葉はどうか

A トルコ語であるが、ロシア語ももちろんできる。カザンでは、はじめ

トルコ系の学校に入学して宗教・言語を教育され、のちロシアの学校に入学したが、大学まではいった人もある。日本語は知っていても文字が読めない。ロシア語は文字も読める。

一九〇五年日露戦争が始まった時、トルコ＝タタール人は日本が勝つように祈っていた。何故ならば、日本が勝てばトルコ＝タタールの暮しは楽になるからで、事実、日本の勝利によってその通りになった。ロシアからは諸々の制約を受け、圧迫されていたが、敗戦によりそれらの力が弱まり、印刷物の出版等が認められるようになった。それまではトルコ語の新聞などの印刷物を出版することは禁じられていた。タタールはトルコ民族のことであるが、現在トルコでは郵便配達夫という意味で用いている。このタタールの意味は三通りあり、①赤毛人（しかし、現在のタタール人の中に赤毛の人はいない）②草の名、③チンギス汗、である。ロシアは多民族国家であり、今トルキスタンと言っているが、昔トルキスタン・カザルキスタン・バルキスタン・キルギスタンと言われ、皆同じトルコ民族である。ただロシアがトルコ民族の団結を防ぐために、かつてに名前をつけたに過ぎない。親とは五〇年間音信不通である。

ヴォルガの王（回教徒）ヴォルガリーからわれわれは初めて回教をうけた。当時オウマス汗がアラビアから回教の僧侶を一人つれてきて、回教をわれわれに与えた。そしてジャウバリという名をもらった。われわれが回教徒となる以前はシャーマニズムだった。

——神戸と代々木上原にあるモスクは

A 富ヶ谷の方が先に建った。神戸の方は皆トルコに帰ってしまい、ただ、僧侶がいるだけとインド人が時々礼拝に来る程度で、消えたようなもの

である。しかし、東京は栄え、祭（バラム）の時は一五〇人位の人々がやってくる。

ロシアにいたころの話だが、ロシアは税金だけをトルコ＝タタール人から多くとりたてたが、われわれの面倒は少しもみてくれなかった。われわれがロシア人になぜかとたずねると、彼等は「回教徒は酒を飲まないからだ」——ロシアについての酒税は最も多かった——と答えたが、それは口実に過ぎなかった。もちろんわれわれは飲酒を禁じられているので飲まない。日本に来てからはどこからも援助がなく、生活は非常に苦しかったが、その中から一銭・二銭と貯め合って富ヶ谷に学校を建てた。一九〇五年の戦争後ヘルピンから多くのトルコ人が来て駐在したり大きな店をつくったので、そこからも寄付してもらったりした。われわれはロシアにいた時と同様にすべてを自分たちの力でやってきた。

今はみなアメリカや日本の学校に通っている。若い人たちは日本人と結婚し、半分は日本人である。ロシアにいるころは誰もロシア人を娶らなかった。日本に来てからは皆日本人を妻にしている。私の息子二人も日本人と結婚し、一人娘は朝鮮戦争の時、兵士の中にトルコ人がいて、その人と結婚し、孫が三人いる。今二代目として日本に二十家族位いる。

——あなたの結婚はいつか。

A 一九三二年、妻は日本人。

——亡命した人々は日本にだけきたのか

あの時代二つの軍ができていたが、一つはブランゲルといいフランス（パリ）からヨーロッパ各地に四散し、今一つのオウムスクはシベリアから日本に渡った。フランスには多数が渡った。チタという町にはシベリ

アコサックがたくさんいた。

——革命時に亡くなった人の数は。

A 全部はわからないが、私がカザーン・トルコ人のデイクトラケン、ア
プトラシンから聞いたところによると、カザーンの町で殺された人はお
よそ五百人位で、それらは皆偉い人たちばかりであった。皆銃殺であっ
た。その他に数えきれない人が殺された。カザーンが負けた時、イワン
雷帝は回教徒皆殺しの命を出し、クリスチャンになれば、命を救ってや
ると云ったので、憶病者は皆改宗した。それらの人々をわれわれはクリ
ツシュオン（洗礼された人々）とよんだ。

——日本にきて風俗習慣上もつともなじめなかったものはなにか。

A 別がない。われわれにも外出用のオーバーシューズがあつて、外出時
はそれを着、帰宅の時脱いで家の中にはいる。日本には畳があるが、わ
れわれは絨緞じゅうたんをもつていて土足で絨緞の上には上らない。常食はパンで
あるが、米も食べるからそれほど困らない。カザーンではヴォルガ河か
ら魚がたくさん取れるので魚は食べていた。

——外国人として日本にいて不自由はしないか。

A 別に不自由していない。私は今扶養家族です。日本国籍をとった人は
あまりいない。日本国籍をとるのは難かしいからである。